光と闇の法剣

水瀬藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と闇の法剣

【Ｎコード】

Ｎ４４２７Ａ

【作者名】

水瀬藍

【あらすじ】

四年前ーー不自然な事故により家族全員を失った少女、星野恭子。彼女の生きる望みは「弟が生きているかもしれない」という、希望的観測だけだった。日々を費やし、非日常に足を踏み入れた恭子が見たものは？そして、弟の生死は？※現在、休止中です。

日常のなかの朝

ピピピ……ピピピ……ピピピ……。

薄暗い部屋に聴き慣れた電子音が響き渡る。

「…………」

ピピピ……ピピピ……。

「……んんっ」

夢うつつ、心地良いまどろみの中で、彼女はだるそうに寝返りを打った。

ピピピ……ピピピ……ピピ——

「……うるさい」

寝ぼけ眼で呟いて、机の上に置いた目覚ましを手探りで止める。しかし同時に、いつものことながら、立ちくらみを起こして床にへたり込んでしまった。

「ううっ……」

軽い頭痛も覚えてこめかみを押さえながら、ちらりと時計を見やる。

午前六時——いつもどおりの朝だ。

時間を確認すると、かすかに射し込む眩い陽射しから逃れるように、ベッドに潜り込んで丸くなった。そうしてから、じっと耳を澄ませる。

早朝の街独特の空気。静けさの中にどこか騒がしさがあるような——そんな感じ。

彼女はその微妙な気配が好きだった。

始業まで二時間以上も余裕があるが、それでも低血圧の彼女が苦労して早起きをするのには理由があった。

彼女——星野恭子は、二度寝が大好きなのだ。彼女曰く、平凡な一日の中にある『七つの小さな幸せ』のうちの一つなのだという。

残りの六つは知らない。

気がつけば、恭子は小さな寝息をたてていた。

＊　＊　＊

がやがや、ざわざわ。
街の喧騒に再び恭子の意識が覚醒する。
自宅前の道路は小・中・高と、地区のそれぞれの学校への通学路となっているため人通りが多く、わざわざ目覚ましをセットする必要もないほどだった。が、始業十五分前。いくら学校が近いとはいえ、そろそろ危うい時間だ。
「……起きなきゃ」
眠い目を擦りながら、ふらふらと部屋を出ていく。相変わらず階下は静かだった。
ごく一般的な家庭ならば『まだ寝てるの？早く起きないと遅刻するわよ！』などという温かい声が台所から聞こえてくるのだろうが、あいにく恭子に母はいない。
それどころか父も弟も――つまりは家族全員――四年前の事件で失くしていた。
――いまごろは、天国で仲良くやっているのだろうか。
ふとそんな風に思うこともあるが、正直どうでもいい。だいたい神の国なんてものは信じていないし、恭子とは二度と会えないことに変わりがないのだから。過去のことであれこれ悩むのは無意味なことだ。
階段を降りて洗面所へ向かう。いつものように鏡の中の自分と向き合うと、思わず苦笑してしまった。
目が真っ赤だ。
記憶には残っていないが、またあの夢を見ていたのだろう。最近、同じ夢ばかり繰り返し見ている気がする。何度見ても慣れることなどない、強烈な――
「……………」

恭子は沈みかけた心を持て余して、とりあえず顔を洗った。ひんやりとした感触が肌に広がると、一気に目が醒める。それから髪を梳きながら歯を磨く。髪の長さはせいぜい肩にかかるかどうかというところだし、寝グセも少ないほうだから、他の女の子たちよりは朝の準備が楽だ。化粧もしないし。

自分の顔についてどうこう言うつもりはないけれど、可愛い系か美人系かと聞かれたら——まあ、まず無視するだろうが——たぶん、可愛い系の部類に入るのだろう。決してブスではない……と思う。こればかりは、人に見てもらわないと分からないが。

リビングで昨日脱ぎっぱなしにしていた制服を着るころには、始業時刻が迫っていた。走っても間に合いそうにない。

母の遺品である腕時計を左手首にはめながら、秒針を見つめる——あと十秒。

「……五、四、三、二、一」

キーン、コーン、カーン、コーン……。

タイミング良く、学校のチャイムが鳴り響いた。距離が近いと、こうして音が聞こえるのでいろいろ便利だ。昼休み前とか、放課後とか。

「はい、遅刻確定っと」

誰にでもなく呟いて、恭子はソファーに身を沈めた。

「……あ」

朝のワイドショーにも飽きて、出かけようと決めて——玄関で靴を履きながら、何かを忘れていることに気がついた。だが、その『何か』がわからない。

持ち物のチェックは、ついさっきした。朝食も摂ったし、学校に遅刻の連絡もいれた。

——風邪気味なので、病院に寄ってから学校に行きます——

……嘘も方便、というやつだ。自慢だが、成績は常にトップクラ

スなので、出席日数が足りなくても特に問題はない。
「…………」
じっと考え込んでいると、ふと靴箱の上の写真立てに目がいった。
中一のときに家族四人で撮った最後の写真。そして、四人全員が笑っている唯一の写真だ。感情を表に出すのが苦手な恭子ですら、満面の笑みを浮かべていた。
「…………」
過去を振り返ることに意味はない。けれど……それでも、想い出は綺麗なまま残るから——
「行ってきます……お父さん、お母さん……蒼司——」
弟の顔を指先でなぞって、家を出た。

―四年前―

三人は交通事故で死んだ。警察からはそう言われた。

もちろん事故現場も見たし、アスファルトに飛び散った大量の血の跡も見た。両親の遺体だって、この目で見た。しかし、弟の――蒼司の遺体だけは見ていなかった。恭子がどれだけ掛け合っても、会わせてもらえなかったのだ。紙くずのような死亡診断書だけを手渡され、その事実だけを告げられた。最後の別れの言葉すら、言うことが出来なかった。

そして、あまりにも不自然なそのことに疑問すら感じなかったのは、本当に愚かだった。

絶望が心と身体を支配し、廃人のような生活をしていたとき、一人の男が家を訪ねてきた。

あのとき何故ドアを開けたのかは、いまだにわからない。それまでは、一切の訪問者を拒絶していたというのに。ただ、あの出来事によって恭子の人生が変わったのは確かだ。宗教的に言うなら、運命のお導きといったところだろうか。

視線が合った瞬間、男が息を呑むのがわかった。きっと、澱みきって光を失った瞳に驚いたのだろう。屈強な体格のいい男だったが、唇を噛み締め、何かに堪えるようにしていた。

恭子がぼうっと顔を眺めていると、突然男が頭を下げた。

「申し訳ない――！」

恭子は反応しなかった。というか、その言葉の意味がわからなかったし、それについての興味もなかったからだ。何も感情が湧かない。恭子にとって、自分を含めた全てのことがどうでもいいものになっていた。

「とりあえず、中へどうぞ」

なかなか顔を上げようとしない男に言って、恭子はさっさと奥へ

引っ込んだ。予想外の行動にためらいながらも、慌てて男がついてくる。
「お茶をお出し致しますから、そこに座って待っていて下さい」
リビングに入って振り返る。男は何か言おうとしたようだが、構わず恭子は台所に入っていった。
恭子自身、何をしているのか分かってはいなかった。道徳という催眠術にかかっていただけなのだろう。
「……どうぞ」
お茶を沸かして男の前に置くと、恭子は反対側に座った。
「……申し訳ない」
何に対してか、またも男は頭を下げた。
――やっぱり、わからない。
「君の両親を助けることが出来なかった……」
「……え」
両親？　助ける？　急に何を言い出すんだ、この人は。
唐突に発せられた意味のある言葉に、恭子は混乱した。しかし、両親は間違いなく死んでしまったのだと、改めて思い知らされることで、少しずつ無くしかけていた理性を取り戻そうとしていた。
きっかけは、そう――事件の関係者に出会えたこと。
「どういう、ことですか？」
数分の沈黙のあと、感情の込められた、かすれた声で恭子が聞いた。
「私の両親は、交通事故で――」
「……違う。あれは事故なんかじゃない」
恭子の変化を読みとって、男は重い口を開いた。
「……聞いてほしい。君には知る権利がある」
両親は元々、御神三家という組織の一員だったのだという。二人がいわゆる職場結婚をして子供を産んだあとも、父は隊員、母は研究員として働いていたそうだ。

御神三家とはその名のとおり、神谷・神崎・神代の三家を首長とする対邪族機関——簡単に言えば、化物を退治する組織らしい。にわかには信じきれない、非現実的な話だった。

「君の両親は——暗殺されたんだ」

「——っ!?」

聞き慣れない単語とその意味するところに、恭子は息をするのも忘れて呆然とした。

「あの日、あいつの車は蛇行しながら、尋常じゃない速度で国道を走っていたんだ。十数分それが続いて、突然炎上した。そして歩道に乗り上げて壁に激突——。一般人の目から見れば、狂人の交通事故かもしれない。だが、その件には敵の送り込んだ邪族が関わっていた。我々も警戒していたのだが、気づくのが遅すぎた——!」

淡々と、それでいて溢れる感情を抑えるように、男は話し続ける。

「……な、んで?」

その場の光景が浮かんでしまい、なんとか嗚咽を堪えて聞いた。

「君のお母さんの研究が、成功したからだ……」

なんとなく——やっぱりと思ってしまった。何度か『極秘』と記された書類を見かけたことがあったから。

「それは……なんですか?」

たぶん最高機密ものだろうが、家族を奪った研究の内容が気になった。聞いて何になるという訳でもないけど、聞かずにはいられなかったのだ。

興味本位でないことを目で訴えると、仕方がないといった感じで男は答えてくれた。

「——組織の隊員が邪族との戦闘時に使用している霊剣というものに、改良を加えたものだ。まだ試作品の段階だったのだが、敵に知られた」

「それで……殺された、ですか……」

「ああ……その試作品を我々は法剣と呼んでいたのだが、敵にもそれの価値がわかったようだな」

自嘲気味に笑った男の表情が妙に印象的だった。
「――霊剣に法印という古代の呪紋を刻み込んで、詠唱とそれによる共鳴に反応して術が発動するものだ」
「魔法、みたいなものですか？」
「正確には違うが、まあそんなものだな。『魔法』を使えるようになったことは、組織としては大きな成功といえただろう」
「…………」
その言葉には、何か苦々しい思いが含まれているように感じたのだが、気のせいだろうか。
「だが、法剣の製法に関するデータは綺麗さっぱりなくなっていた。そのために、たった一本の法剣が残されたわけだが、それの行方も知れず。おそらく――君のお母さんが破棄したのだろう」
「……どうして？」
「……どうしてだろうな」
その法剣というのがあれば、邪族との闘いが楽になるはずなのに。言い方からして何かを知っているようだったが、聞いてはいけない気がした。
リビングに静寂が満ちて恭子が窓の外を見ると、早くも夕日が沈みかけていた。事件の詳しいことは知ることが出来たし、そろそろお引き取り願うべきだろう。
そんな恭子に気がついたのか、男は立ち上がって頭を下げた。いちいち律義な人だと思う。
「今日はすまなかった。そろそろ帰ることにするよ」
「いえ……わざわざ、ありがとうございました」
一応の礼を述べて、玄関まで男を見送る。そこで男は振り向いて呟いた。
「言おうか言うまいか迷ったのだが……やはり伝えるべきだろう」
「え？」
「君の弟……蒼司くんだったな。彼は――生きているよ」
「――っ!?」

いま……なんて？
「確かに事件に巻き込まれたはずだが、信憑性の高い目撃情報がいくつか寄せられている。記憶を失って、どこかで保護されている……そんなところだろうな」
「居場所は……その、捜せないんですか？」
「……残念だが、組織として動く余裕はない」
「そう、ですか……」
衝撃的な知らせに動揺しながらも、自分の中で決意は固まった。男の訪問が自己満足の罪滅ぼしかもしれないとは思っていたが、もしかしたら、心に抱いたこの願いを叶えてくれるかもしれない。そう思った。
「ひとつだけ……最後にお願いしても、いいですか？」
「……なんだ？」
何を言われるのか予想もつかないといった様子で、男は聞き返してくる。
「私を――組織に入れてください」
「な……に？」
男は茫然と立ち尽くしていた。
そう、恭子は失ってしまったものは諦める。
両親を亡くしたことは凄く悲しいが、どうにもならないことだ。だからこそ、何も出来ずに落ち込んでいた。しかし、蒼司にはまだ会えるかもしれない。わずかでもいい。可能性が――希望があるのなら、とことん追いかけてみたい。それが、星野恭子という人間なのだ。それが、乏しい表情の仮面に隠した情熱だった。
さすがに二つ返事とはいかなかったが、後ろめたさもあったのだろう。試験のクリアが条件の仮所属ということになった。その場で返事が聞けたということは、男がかなり上層部にいたのか、はたまた独断だったのか、それはわからない。
ともかく、二ヵ月後には御神三家の作戦部に、正式に配属されることになった。

「ふわぁぁぁ……眠ぃ」
春の陽射しは暖かく、風は心地良い……花粉症が曲者だが。
少し遠くに駅前の大時計台が見える。家を出てから既に三十分近く経っていた。少し考え事をしていただけで、このありさまだ。家とこの丘は、ほんの数分の距離なのに。
星降りの丘と呼ばれるここは、恭子のお気に入りだった。昼寝をするにも、天体観測をするのにも絶好の場所だ。そして、南側には広大な海が見える……はずなのだが、残念ながら海沿いが曇っているらしく、水平線を臨むことは出来なかった。ちなみに、北側には街の双峰がそびえている。名前は忘れたが、霊山だということだけは覚えていた。
「………」
ご利益があるのか分からないが、とりあえず手を合わせて拝んでみる。願い事は湧いて溢れるほどあるが、それは欲張りというものだ。信じてはいないが、罰が当たるかもしれない。
「……今日も生きていられますように。それから……蒼司と巡り逢えますように」
無意識に瞑っていた目を開けて、辺りを見まわす。
特に異常はない。誰かに見られていた気がしたのだが——
「気のせい……かな？」
一人納得して、恭子は丘を下っていった。

＊　＊　＊

「んっ？」
手元で着メロが鳴った。聴き慣れたメロディーだが、曲名は知らない。

かばんをごそごそと漁ると、細い指先がバイブの振動を感知した。その物体を取り出して、液晶画面を見る。

着信。発信者、風見恭也。

「………」

出ようか出まいか逡巡したが、仕方がなく通話ボタンを押す。たとえ相手がどんな人でも――『恭子と恭也で恭つながり』とかいう訳のわからない理由で組まされたペアの相方だったとしても、一応は組織の人間だ。出なければなるまい。

「……もしもし」

『あ、恭ちゃん？電話出るの、遅かったな。どうかした？』

「別に……なんでもない」

この『恭ちゃん』というのは恭子のことだ。恭也には『恭くん』と呼んでほしいなどと昔に言われた記憶もあるが、一度として呼んだことはない。子供っぽくて恥ずかしいし。

「それで……なんの用？」

ぶっきらぼうに聞くと、不満そうな嘆息が届いたが、無視した。恭也と話すのは不快ではあるが、苦痛ではない。ただ自分ではわからない、もやもやとした感情が心の奥に住みつこうとするのが嫌なのだ。

『いま、どこにいる？』

「……学校」

『その辺で天使さん、見かけなかったか？』

「……だから、学校……」

『この時間は授業中だろ。それに騒音が聞こえてる』

「………」

完璧にばれてる。それに一方的だし。

「はあ。とりあえず市内にはいるけど？天使さんって……何？」

厄介ごとはなるべく避けたかったが、諦めて話を聞いてあげることにする。

『人間と同じくらいのサイズで、光ってる奴。駅のほうに逃げたは

ずなんだけど』
「……逃げた？」
精神を集中させながら、駅前へ歩いていく。特に目的もなかったから、暇つぶしにはなるだろう。恭也一人ってことは、研究部のモルモットかなんかだろうし。
『いや、逃げたっていっても逃がしたわけじゃなくて。ホントもう少しだったんだけど』
「ふぅん」
『……信じてないな。事実だけを述べるとだな——』
「待って」
恭也の弁解を制して、足を止めた。
歩き始めてすぐ、大通りへ出るところの曲がり角にそれはいた。
確かに光ってるし、浮いてるし、羽も生えてるけど——
『いたか？』
「いたけど……お願いだから、邪族って言って」
正式名称は『邪なる者たちの血族』とかいう長ったらしい名前なのだが、言いにくいので略して呼ぶのが普通だ。
姿形こそ天使だが、それはひどい邪気を周囲に放出していた。
『気にするな。それで……そいつ滅ぼしてくれない？』
「……街中で？」
『うっ……』
「つまりは任務に失敗したと？」
『ち、違うんだ！本当にもうちょいだったんだけど』　邪族の前だというのに、恭子は思わず苦笑してしまった。『だけど……』は恭也の口グセだった。自信のないときは、いつもそういう言い方をする。
「ま、そこはどうでもいいけど。要は私を後始末に巻き込もうって訳ね？」
『うぐっ……ごめん』
「菓子パン十個」

問答無用で処分を下す。いつもだったら平気で百個とか言うのだが、なんとなく気分が良かったので今回は軽くしてあげた。
『えっ？』
しかしそこで素直に頷けばいいものを、人の好意を無駄にするバカがいた。そんなに意外だったろうか。
「……不満なの？」
『い、いや。そんなことないけど——』
なんかムカついてきた。
「百個に決定」
『え、ちょっと……！』
「…………」
『…………』
「…………」
『……了解』
まるで返事を待っていたかのように『天使さん』は動いた。
武器は——ない。
「逃げるしかないか……」
どこか人のいない広い場所へと誘き寄せなければいけない。けど、丘は汚したくないから、他に——
「——恭也、聞こえる？」
走り出しながら、携帯電話に呼びかける。
『聞こえてるよ、どうした？』
邪族は一般人には視えない。だから、この光景を外から見たら何事かと思うだろう。近所の高校の制服を着た少女が、飛んだり跳ねたりしながら携帯片手に全力疾走しているのだ。自分がそれを見かけたら、きっとこう思う。ああ、もう季節の変わり目かぁ、と。
「私、いま武器がなくて……邪族を郊外の廃工場まで誘導するから、恭也も向かって」
『わかった』
返事を聞いて、恭子は電話を切った。片手が塞がっている状態は

さすがにつらい。
肩越しに『天使さん』の姿を確認して、恭子は盛大に溜め息をついた。
「なんで、朝から追いかけっこしなきゃならないのよ」
その疑問に答えてくれる人はいなかった。

非現実の一部

「はあっ、はあっ」
しつこい。『天使さん』の体力は底無しか？
疲労を滲ませながら駅前の噴水広場を抜けると、数本もの閃光が恭子の脇をかすめていった。邪気が不安定なことから大した奴ではないとわかっていたが、直撃をくらえば重傷を負うことは必至だ。
必要最低限の動きで『天使さん』の攻撃をかわしながら、大時計台を横手に改札へと向かい、人だかりの中を強行突破する。何も知らない駅員さんの制止の声が背中にぶつかったが、気にせずに走り抜けた。階段を駆け上がり群集を掻き分け、一気に下る。すぐに反対口の改札へ。ここも構わず突破して、活気溢れる商店街通りへ向かう。朝市はとっくに終わっているはずだが、案外混雑していた。
近道を思い出して途中の路地を右折する。電車が通過する轟音を耳にしながら、線路沿いを真っ直ぐ進んで――
「……工場中、通行止め？」
足が止まってしまう。真後ろに邪悪な気配。
――しまった。
そう思った瞬間、強く腕を引かれた。
「へっ……？」
倒れ込みそうになりながら振り向くと、霊剣を手にした恭也の姿があった。
「こんなことだろうと思ったよ。武器なしで廃工場まで来れるわけないだろ」
恭子の前に立って『天使さん』と対峙する。守られるのは初めてかもしれない。
先に動いたのは恭也だった。霊剣と『天使さん』の腕がぶつかり、その中心で光が弾ける。どちらかが吹き飛ぶことはない。力が均衡しているようだった。

霊剣の能力は、使い手の霊質に比例する。霊力が強いほど威力が増し、霊圧が強いほど結界の強度が上がるのだ。ちなみに結界とは、霊剣が生み出す青白い対邪障壁のことで、使い手の意思により発動させることが出来る。
恭也の霊力はそれなりに強いのだが、霊圧が不安定で弱い。そのため集中攻撃を受けると、簡単に結界を破られてしまう。
負荷に耐えかねて結界が軋み出した。
「走れっ！」
不利を悟って、恭也が叫ぶ前にその場を逃れる。
いまさらながら、自分自身に憤りを感じていた。いつもの挨拶だけでなく、武器まで忘れてくるなんて。注意力に欠けているのにもほどがある。
背後で斬り結ぶ恭也を気にしながらも、恭子は廃工場へと走った。

「それで……？」
二人は無事に廃工場まで辿り着いていた。どうにか『天使さん』を振りきった恭也とポカミスに沈む恭子。普通に考えれば、高校生が真剣を持ち歩くことの方がおかしいのだが。
「んっ？」
「時間……さっきから時計を気にしすぎ」
「……そうか？」
「現れてからどのくらい？」
恭子の問いに、気まずそうに恭也が答える。
「……もうすぐ二時間」
「…………」
「…………」
二人の視線の先に、姿形を崩しつつある『天使さん』が現れた。
「あれ、実体化するの？」
霊剣を持っているのは恭也ひとり。普段はペアで動いているのだから戦力は半分――いや、それ以下だろう。恭子は唯一の法剣の所

持者であるからして。
「……頑張って」
　邪族は霊体のままであれば、それほど驚異ではない。視える人以外に攻撃をしない――それなりの霊質にしか惹かれないからだ。しかし、いったん実体化すると話は違ってくる。生命力そのものを求めて、ところかまわず暴れ出すのだ。かわりといってはなんだが、一応物理攻撃が効くようにはなる。
　恭子はかばんを木陰に置いて、細い鉄パイプを手にしていた。少々心許ないが、霊媒として使えば、なんとかなるだろう。
「来る！」
　完全に実体化した『天使さん』は、羽もなく浮きもせず、地を這うただの化物だった。
　邪族の突撃のタイミングを計って左右に散る二人。それを見ようともせず、邪族は全身から触手を伸ばしてきた。硬質な感じがするが、柔軟なそれは際限なく伸びる。
「くっ」
　時間差のある攻撃を軽やかなステップでかわし、打ち払った。
　恭也の方は霊剣の結界で弾きながら、次々と触手を斬り払っており、一見押しているように見えるが――
「な……早い！？」
　邪族の再生スピードの方が上だった。なおも触手の追撃は続く。
　持ち前の動体視力を駆使して軌道を読みつつ避けながら、弱点を探す。無いものねだりなんかしていられない。どうにか霊剣一本で滅ぼす方法を見つけなければ。
　邪族の動きは恭子も恭也も見切っている。触手も再生しているだけで、増殖はしていない。左右合わせて三十から四十くらいだ。それが物凄い速度で伸びているから無数に見えるのだ。
　狙いは本体の中心にある核と呼ばれるもの。この核さえ破壊すれば邪族は自動的に消滅するが、迂闊には近づくことすらままならない。

「恭也……これ、どうやったら止まるの？」
絶望的に呟く。結局いい案は浮かばなかった。
「……わからない。すぐに祐里姉が来るはずだけど……」
その言葉に一筋の希望を見出だして、すぐに打ち消す。
祐里は御神三家の支部の副司令官だ。色々と忙しいだろうし、そうそう呼び出せるはずがない。たとえ増援が来るとしても、長時間持ちこたえるだけの体力もなかった。
一瞬足が止まったところに全方位から触手が襲いかかってくる。
いつのまにか、ほとんどの触手が恭子の方を向いていた。
前後、左右、上下――逃げ場はない。
そこに恭也が強引に割り込んできた。
「ぐっ……」
「恭也！？」
「早く出てくれ！」
結界の発動とともに包囲から外れ、後ろに跳んだ。そこでやっと隙を見つける。
いくら触手が高速でも、邪族自身は恭子たちよりも遅いのだ。そのため離れた相手に攻撃をするときには、触手を長く伸ばさなければならない。そうすると必然的に本体との間に空間ができる。そこを上手く利用できれば、あるいは――
問題は、触手を戻されるのと恭子が核を破壊するのと、どちらが早いかということだが。それは恭也におとりになってもらうしかないだろう。
「恭也、霊剣貸して」
距離を取って手短に説明する。かなり無茶な作戦だが、すぐに頷いてくれた。
「……わかった。でも相当早いぞ、あれ」
「けど、やるしかないでしょ」
威嚇のためか、数本の触手が伸びてくる。恭子も恭也も動かない。
「ふうっ……」

ゆっくりと息を吐き出して、霊剣を突き出す。
「対邪障壁、発動」
意思に反応して青白い輝きが生まれる。恭也のそれよりも遥かに強大なエネルギーは、襲いかかってくる触手のことごとくを焼き払った。
呻き声を発して邪族が無数の触手を伸ばす。そのすべてが結界の一点に集中し負荷が強くなるが、わざと押し返されるように後退する。準備は整った。
「行くよ」
背後の恭也に宣言して、横へ跳ぶと同時に結界を解除する。行き場を失った触手はそのまま前方の恭也へと殺到した。
恭子は身をかがめて本体へ走る。数十メートルの距離。
霊剣に付加されている能力は二つしかない。それが対邪障壁と霊圧力波で、一般に結界や衝撃波と呼ばれているものだ。
核の位置を確認して衝撃波を打ち出す。わずかに狙いが逸れて肩口を傷つけたが、邪族も動く様子がない。恭也が頑張っているようで触手はまだ戻ってきていなかったが、何かがおかしかった。しかし、直感に確信を持ったときにはもう手遅れだった。
眼前に深い黒色のエネルギーが収束する。中位以上の邪族にしか使えない能力だ。
「なっ……アークエネミー！？」
振り抜いた霊剣と黒球がまともにぶつかる。結界を発動する余裕はなかった。
白と黒の光が弾けて吹き飛ばされる。大樹に身体が叩きつけられ、全身――特に下腹部に強い衝撃が走った。
「くっ……はふっ」
「恭ちゃんっ！」
「はあ、はあ……女の子の身体に……なんてことするのよ」
人の言葉を理解できない相手だとわかっていながら、つい口に出ていた。

「あうっ……」
すぐに立ち上がろうとして、強烈な痛みと眩暈にその場で崩れ落ちてしまう。
視界を揺らしながら、這うようにして触手を避ける。霊剣は手の届かないところに飛ばされていた。恭也も避けるのが精一杯で助けには来れそうもない。
「やだ……」
――こんなところで終わるのは嫌だ！
気力を振り絞ってなんとか立ち上がったとき、目の前で金色の長髪が揺れた。
「あ――」
「鳳凰二刀流――桜花乱舞」
女性の左右に構えられた二本の霊剣が、凄まじい速さで振るわれる。周囲の触手をことごとく薙ぎ払い、ついで腰に差していた長剣を恭子に向けて放り投げた。
痛みは残っていたが身体は反射的に動いていた。
鞘を左手で掴み、右手を柄にかけたままで、邪族のふところに飛びこむ。
抜きざまの一撃。本体を斬り上げ、核を叩く。紙一重でかわされるが、足元を薙いで体勢を崩すと、さらに手首を返して横に一閃した。
核に亀裂が刻まれ邪族が地に伏せる。それでも最期の抵抗とばかりに、再生しかけの触手を伸ばしてきた。
「うーん、惜しい。もうちょいだったわね」
透き通った呟きとともに後方からナイフが飛来する。それは狙い違わずに邪族の核に突き刺さった。粉々に割れた核は一瞬で塵と化す。
「……祐里さん」
「珍しいわね、恭子ちゃんが恭也と一緒にいるなんて。任務中って訳でもないのに」

恭子と恭也と崩れ滅びゆく邪族を見ながら、祐里は笑った。
金髪のよく似合う女性で、恭子とは真逆のタイプ——美人系のお姉さんだ。二十四歳だというから、恭也とは七つも離れた姉弟ということになる。
「わざわざ、ありがとうございます——助かりました」
自宅に置き忘れたはずの法剣を手にして、恭子は頭を下げた。
「いいのよ、別に……どうせ暇だったしね」
本当のところ暇なはずがないのだが、素直に感謝した。恭也に事情を聞いて、家から持ち出してきてくれたらしい。元々自宅の鍵は預けてあるから問題はないが——
「法剣、忘れないようにしなさいよ?誰が狙ってるかなんて、わからないんだから」
「……はい」
真面目な表情で祐里は恭子をたしなめた。
「恭ちゃん！祐里姉！……大丈夫か？」
恭也が駆け寄ってきて、心配そうに顔を覗きこんでくる。思わず赤面してしまい、よくわからない感情を抱きながら、恭子は顔を背けて目を逸らした。
「まったく、大丈夫か……じゃないわよ。単独任務だったのに、結局恭子ちゃんを巻き込んでるじゃない。実力が足りない証拠よ！」
「言われなくてもわかってるよ、それくらい！自分でも自覚してんだから……」
「だいたいね——」
姉弟の口ゲンカを聞きながら、大樹の根元に座りこむ。痛みとともに急に疲労感が押し寄せてきて、景色がかすみ始めた。昨日も夜に任務があって寝不足気味だったから、疲れが取れていないのかもしれない。
恭子は太い幹を背もたれにすると、しばしの平穏に身を委ねた。

「――お疲れ様。悪かったわね、巻き込んじゃって。今日も学校でしょう？」
「いえ……大丈夫です」
気がつけば、すぐ隣に祐里が座っていた。どうやら、うたた寝していたらしい。
「このあとはどうするの？」
雲ひとつない青空を見上げながら、祐里が聞いてきた。
太陽はもうすぐ南中する。そろそろ昼休み時だろうか。
「とりあえず……学校に行くつもりですけど……」
このままサボってしまおうかとも思ったが、そうもいかない。一応、病弱な優等生で通っているわけだし。遅刻の連絡を入れた以上、無断で欠席するのは少々気がとがめた。
「そう――じゃあ、その前に付き合ってくれる？お昼はまだでしょう？」
「えっ……あ、はい。でも――」
「あ、俺も行くよ」
いつからいたのか、恭也がひょっこり顔を出して会話に割り込んできた。
だが、恭子がおもいっきり嫌な顔をしたのと同時に、祐里は簡潔に言い放つ。
「ダメ」
「なんでだよっ！昼飯ぐらい一緒でもいいだろ？」
恭也が抗議の声を上げる。この姉弟はことあるごとにぶつかるのが常だった。祐里は楽しんでいるようにしか見えないのだが、恭也はわりと本気らしい。
恭子はそんな二人を見るたびに、胸が痛む思いをする。
「ダメよ。女の子同士、秘密の話もしたいし。なにより――」

「なにより？」
聞き返した恭也に、祐里はにっこり笑って答えた。
「あんたは支部に戻って始末書を書かないと。誰のせいで、女の子ふたりが巻き込まれたのかしら？」
「それは——」
「しかも副司令官を都合よく呼び出すなんて……どんな権限があってのことか、説明してもらえる？」
「…………」
恭也は何か言い返そうとしたが、それが無駄なことだと悟ったようだ。
「返す言葉もないようね。それじゃあ行きましょうか、恭子ちゃん」
「……はい」
——まだ付き合うとは言ってないんですけど。
そんなことを祐里に言えるはずもなく、恭子は黙って連行されていった。

＊　＊　＊

「えっと……Aランチのセット、ドリンクはアイスコーヒーで。恭子ちゃんは？」
「……同じのでいいです」
注文を復唱してウエイトレスが厨房へ向かう。恭子と祐里は大混雑の店内を見回して溜め息をついた。
平日のランチタイムだけあって、客足は途絶えることがない。おもに主婦やOLが客層の中心だが、職種不明の若い男どもがちらほら居座っている。
「最悪ね。やっぱり、あの喫茶店で妥協しておくべきだったわ」
祐里がひとり呟く。それに関しては恭子も同感だった。
狭い路地の奥に、古ぼけた感のある喫茶店を見つけたのだが、なんとなく怪しい雰囲気があって入りづらかったので、わざわざ大通

りまで出てきてしまったのだ。しかし、それも間違いだった。
「………」
なんとなく会話が途切れる。祐里は、じっと窓の外を見つめていた。
「あの……」
ついさっき気づいた疑問を、恭子は口にした。
「恭也、なんで一人だったんですか？いつもなら、すぐ私のところに連絡がくるのに」
「えっ――！？」
ちょっとしたことを聞いたつもりが、思いのほか大きい反応が返ってきた。
「えっ――？」
つられて、恭子も同じような反応をしてしまう。
「あ、ええっと……まあ、いろいろあって。司令室の方もちょっと混乱してたから」
曖昧な祐里の口調に不審を抱く。そして一つの推測。
「……私がいてはいけませんでしたか？」
疑問形だが、確信を持っているように言った。
「……はあ。やっぱり分かっちゃうよね。んー、恭子ちゃんには通用しないかぁ」
わざとらしく、あっさり誤魔化すのを諦めて、不意に祐里は真剣な顔になった。最初から、話すつもりだったに違いない。
「仕方ない、特別に教えてあげる。ただ――落ち着いて聞いてね。まあ、恭子ちゃんなら大丈夫だと思うけど……」
その言い方でわかってしまった。少なくとも、恭子にとって一番大切なことが話される、ということは。
「……だいたい予想はついてますし、覚悟もしてますから……」
そうだ。自分が組織の問題になるようなことなど、他にはない。四年前の事件から連なる出来事。託された法剣と弟の失踪――確かに、上層部の悩みの種ではあるだろう。

恭子は思い返していた。失った過去と手に入れた現在、変わるかもしれない未来。家族と仲間。問いかけと答え。いま心に抱く自分の気持ち――

「……そっか。うん、だよね……」

同じ立場の――両親だけでなく一度は弟の恭也すら失いかけた祐里は、恭子の一番の理解者だった。姉として――親よりも身近な人を失うことは、死に等しい苦痛を味わうことだった。

「弟くん――蒼司くんだっけ？……見つかったわ、ついさっき」

ふと思った。丘で感じた気配のようなものは、蒼司だったのかもしれないと。たぶんに自惚れだろうが。

「九時前、かしらね。三体の邪族が出現して、二人を現場に向かわせようとしたの」

二人とは、もちろん恭子と恭也のことだ。

「そしたら、本家の名義で直接命令が下ったのよ。『星野恭子の召集は禁止する』って。おかげで恭也一人を行かせるしかなかったんだけど……うちは人手不足だしね」

苦笑いをする祐里。本当は、恭也が心配でしかたなかったのだろう。はっきり言ってしまうと、恭也は弱いから。

「ま、それはともかく。理由はわかりきってるわ。蒼司くんが生き残って、相手方の組織にいたから」

「…………」

不思議な気持ちだった。

ほっとしたのと同時に、何故と思った。けれど、やはりとも思った。そんな風に考える冷静な自分がおかしかった。

「安心して。たぶん敵じゃないから」

「……なんで」

「え？」

「私と蒼司が接触すると、何か不具合があるんですか？」

「……やっぱり、鋭いわね。詳しいことはまだ言えないけど……そのうち全部わかるわ」

そう言った祐里の視線が、側らの法剣に向けられたのがわかった。
法剣は鞘に収めて布で包んで隠してある。
「それで——蒼司は？」
はやる気持ちを抑えて、つとめて静かに聞く。
「わからない。居場所までは掴めてないから……」
ただ——と祐里は続けた。
「街にいるのは確実だから、そのうち会えるかもね」
頬づえをついて、祐里は複雑な表情を浮かべた。

昼食を摂ってファミレスを出たときには、ちょうど昼休みが終わるころだった。
「今日はホントにありがとうございました……いろいろと」
「いいって……全部気まぐれみたいなものだし」
何もなかったかのように変わらない微笑みを恭子に向けて、祐里は言った。
「それに——いつかは、わかっちゃうことだしね」
「……それじゃあ、学校行きますね」
「ん、行ってらっしゃい」
その何気ない一言に、懐かしい母のぬくもりを感じた気がして、泣きそうになりながら恭子は祐里に背を向けた。

守りたいひと

キーン、コーン、カーン、コーン……。
午後の授業を一通り受けて、放課後——帰りのホームルームがないこの学校では、自然解散となる。
「あ、恭子ちゃん！」
さすがに今日は来ないだろうと思っていたのだが、顔見知りの少女が廊下から教室の中を窺って、こちらに目を止めると声を掛けてきた。すっかり習慣になってしまっているらしい。
彼女は大半の生徒たちの流れに逆らって……というか、モーセの出エジプトのごとく行く先を開けられて……というか、よくわからないのだが、何故か当たりまえに案内されるような形で、恭子の前までやってくる。
「学校来れたんだぁ。風邪ひいたって聞いたから……お休みかと思ったよ」
「え？」
毎度のことに苦笑していて、一瞬なんのことだか分からなかったが、すぐに思い出した。
「あ、うん。軽い風邪だったから、ぜんぜん平気。病院にも行ったし」
「そっかあ……よかった。最近、欠席が多いから心配しちゃった」
嘘をついていることに少し——かなり良心が痛んだが、笑ってごまかした。
恭子に話しかけてきたのは、通称リトル・プリンセス、柚原美里。学年性別を問わず絶大な人気を誇る彼女を一言で表すと、ちっちゃくて可愛い。身長が低く顔立ちに幼さが残っていることもあって、私服姿だと小学生に見られることもあるらしい。
この学校での唯一の友人といえる彼女の性格は、別講座のクラスまでやってくることからもわかる。いわゆる心配性のお節介焼き。

恭子は人付き合いが悪いわけではないのだが、任務で学校を休むことがしばしばだったため、特定の友達はいなかった。美里と親しくなったのは、彼女の性格のせいだろう。

「心配かけてごめんね。ところで、このあとは？今日も部活？」

恭子は部活に入っていないのだが、美里は文芸部に所属している。彼女が書いた作品をいくつか読んだこともあるが、感情表現だけでなく感受性にも乏しい恭子には、凄いとしか言いようがなかった。ただひとつ素人意見を言うとするなら、人の心の闇を知らないのかなとは思ったが。恭子は、それでいいと思った。

偏見だけど――美里には、そういうのは似合わないから。

「ううん。今日は部長がいないから、お休みだよ。恭子ちゃんは……お稽古？」

布に包んだままの法剣を指して、美里が聞いてきた。学校の人間には、帰りに道場に通っているということにしている。

「――まあ……ね」

美里の前でお茶を濁すような風になるのは仕方ない……が、正直きつかった。

「そっか、じゃあ途中まで一緒に帰ろ？」

恭子の腕を引きながら、美里が首をかしげる。女の恭子から見ても十分に可愛いと思った。惚れてしまいそう――いや、母性本能がくすぐられる気がする。

「……帰ろうか」

他愛のない話をしながら、二人並んで正門へと歩く。

やっぱり、こういう時間が好きだ。恭子はそう思った。家族がいない分、仲間や友達がいてくれる。そして支えてくれる。本当の意味では、心から思うことは出来ないけれど、それでも今が幸せだと思えた。

そんな帰り道で恭子が違和感に気づいたとき、美里の呟きが茜色の世界に響き渡った。

「野良犬……かなぁ？ちょっと大きいけど」

「えっ——？」
恭子には数匹の大型犬らしき存在が視えていた。だが、美里には『見える』ことがあっても『視える』はずはない。なぜなら、あれはこの世のものではないのだから。
戸惑いは、それらが大地を蹴る音と美里の息を呑む気配にかき消された。
「美里、こっち！」
身を硬くした美里の腕を引いて、路地の方へ駆け込む。住宅街の迷路を抜け、人気のない公園に入る。夜闇が近づいているせいか、遊ぶ子供たちの姿も見当たらなかった。木々の合間を縫って公園を抜け、さらに複雑な区画へ入っていくが——
「そんなっ！？」
またも行き止まり。今日は運もついてないらしい。
できるなら美里にだけは知られたくなかった。けれど、そんなことを言っている場合でもない。
意識するまでもなく、自分の背中に美里を隠した。そうしてから布に巻いた紐を解いて、法剣を取り出す。
「美里……お願いしてもいい？」
「う、うん」
混乱しながら答える様子が覗えた。
「五分……ううん。三分でいいから、目を閉じて、耳を塞いで、そこから動かないで。わかった？」
「……うん」
本当に恭子のことを信用してくれているらしい。何も聞かずに従ってくれた。絶対に美里を傷つけるわけにはいかない。身体的にも、精神的にも。絶対に——
追って来た邪族が前方の五体だけなのを確認して、恭子も法剣を抜いて身構える。邪族五体といえど、低位の霊体ならばどうにでもなる。
『火界の皇帝よ、理に反する者を清浄なる炎で焼き払え！』

力強い恭子の詠唱と刻まれた法印が共鳴して、聖火の波が邪族たちを襲う。
威嚇の一撃にも邪族は怯まない。背後と左右、三方向をコンクリートの壁が囲む閉鎖空間だから、上下にだけ気をつければいいが、五体同時は勘弁して欲しい。
恭子は自分から踏みこむと、法剣を一閃した。隙を見て左右から飛び込んできた邪族の一体を結界で打ち払い、一体の核を破壊する。もう一歩踏みこんで次の詠唱に取りかかりながら、法剣を振るった。
『冥界の姫君よ、さまよいし魂なき者を在るべき場所へ導きたまえ!』
その呪文は、正面の邪族を瞬く間に消し去る。
残るは三体。恭子も邪族も動かない。いや、邪族の方は動けないというべきか。初めて見る法術に警戒をあらわにしている。
膠着状態にあって、恭子は法剣を下ろした。無防備なところを見逃さず二体が飛びかかってくる。動きを見極め、上半身を捻って双方の爪をかわすと、遠心力を利用して一体の邪族を斬り払った。返す剣でもう一体を斬り捨てる。一撃で完全に沈黙した。
動かなかった一体も逃げる様子はない。そもそも邪族の行動パターンに逃げるという選択肢はないのだ。
交錯は一瞬。恭子に傷はなく、最後の邪族が地に伏して滅びた。
「ふう……」
完全に視えなくなったのを確認して振り返る。
「……目、もう開けていいよ」
耳を塞いでも、嫌な音は聞こえてしまっただろう。聡明な彼女なら目を閉じていても、何が起きたのかくらい推理してしまう。いまは混乱していて、それどころではないだろうが。
二人して黙りこむ。なんと言えばいいのか分からなかった。邪族は普通の犬の形態をしていたから、それよりも恭子に対する驚きの方が強いはずだ。
「……怪我、してない?」

「え？」
予想もしていなかった言葉に、思わず目を見開いて、美里の顔を見つめてしまう。
ぎゅっと胸を押さえて、心配そうに恭子を見つめ返してくる少女。おそるおそる伸ばした手で、法剣を握った右手に触れてくる。かすかに震えていた。
「それ、真剣だったんだね」
「…………」
「えっと……聞きたいことは、いっぱいあるんだけど……その――わたし、このまま帰ってもいいのかな？」
改めて、美里は強いと思った。いま、自分が置かれている状況を、なんとなくでも理解しているようだった。
見ず知らずの他人ならまだしも、美里が視てしまったものを気のせいには出来ないだろうし、恭子自身のことも誤魔化しつづけるのは不可能だろう。
「ちょっと……待ってて。どうなるか分からないけど……」
それだけ言って、恭子は携帯を取り出した。

「これから……どうするの？」
美里を乗せた車を見送りながら、祐里が話しかけてきた。
「相手方は、あなたの居場所を突き止めたようね。このままじゃあ、たとえ記憶操作をしても同じことの繰り返しよ？ううん……状況はもっと悪くなる。単純に考えて、選択肢は二つ――」
――美里も巻き込むか、恭子が離れるか。
「そう、ですよね。でも……」
「わかってる……これからが大変なんだから」
祐里は恭子でなく、自分に言い聞かせるように呟いていた。
あのあと、恭子は祐里を呼び出した。美里のことを任せるためだ。無責任だとわかっていたが、記憶を消す以外の方法は思いつかなかった。

しかし祐里の言い分はもっともだ。元々、法剣を狙っていた連中なのだから、在りかが完全にバレてしまえば総力を注ぎ込むことも辞さないだろう。そうなれば近くにいる人達に危険が及ぶ。だからといって、美里を巻き込んでいいはずがないし、蒼司を見つけた以上、この街を離れるわけにはいかなかった。
「とりあえず……明日まで保護しておいてもらえますか？」
「そうね、柚原さんの意思もあるだろうし……あんまり若い子は巻き込みたくないんだけれど……」
それは誰に向けられた言葉だったろうか。
哀しげな口調に恭子と蒼司への想いを感じた気がした。
「今日はこのまま帰りなさい。それで、ゆっくり休むこと。いいわね？」
素直に頷いて、恭子は帰宅の途についた。

「…………」
自宅のポストに定番の黒封筒。その場で封を切って中身を取り出すと、簡潔な内容が書かれた紙が一枚だけ入っていた。
『御神三家、作戦部所属、星野恭子さまへ。
今夜九時、貴校の屋上でお待ちしております。どうかお一人でいらっしゃるよう——』
腕時計を見やると、午後五時半。
敵の組織の連中に違いないと思うのだが——あからさま過ぎる。
「行くしかないか……」
今日何度目かの溜め息をつく。理由のないざわつきを感じて、軽く夕焼け空を見上げた。

終わりの始まり

指定の時刻——午後九時。
三十分も前から、恭子は学校の屋上に佇んでいた。あたりまえだが生徒の気配はない。ただひとつ位置の特定はできないが、こちらを覗う視線を感じてはいた。
「…………」
初夏が近いにもかかわらず、冷たい夜風が吹きすさぶ。短く切り揃えられた髪が揺れ、不意に宵闇に紛れていた気配が近くに現れた。
「——っ」
振り向いて法剣を突きつける。そんな恭子の眼前にも同様に——
「な——！？……蒼……司……？」
瞳が映した光景に恭子はがく然となった。四年という歳月を経て雰囲気は変わったものの、昔の面影を確かに残した少年が、そこにいた。
余裕があるように感じられる、直立姿勢から腕を突き出しただけの構え。しかし、わずかな隙もない。
張り詰めた数瞬が過ぎて——
「……久しぶりだね、姉さん」
剣先を下げぬまま、優しく少年は笑った。
「蒼司……なの？」
視界をぼやけさせながら、涙混じりに聞きかえす。
「僕は、僕だよ」
蒼司の姿が目に焼きついた。蒼司の声が耳にこだました。触れずとも、蒼司のぬくもりを感じた気がした。そんな感覚に身体が震えて止まらなくなる。全身から力が抜けて、危うく法剣を取り落としそうになった。
昼間わりと落ち着いていられたのは、現実感がなかったからかもしれない。けれどいまは、こうして目の前に恋い焦がれてきた弟が

いる。同じ時間を、同じ場所で共有している。
その認識は恭子を無防備にしてしまった。
刹那、蒼司が動いた。
「えっ？」
——速い！
動揺のなか驚く自分と冷静に分析する自分。二人を認めて、恭子は反射的に身をかがめる。蒼司の剣は背後に忍び寄っていた邪族の核を貫いていた。
気がつけば、屋上は無数の邪族に包囲されていた。
「……どういう、つもり？」
再会の興奮を押し殺して——溢れそうな感情をも抑えて——あえて冷たく問う。
辺りは邪気に満ちていた。数十……いや百はいるかもしれない。
「それは僕が聞きたいよ。姉さんはまだ知らないだろうけど、半分はそっちの組織の奴らだ」
思いがけないことを言われて、またも驚かされる。
——御神三家が邪族を？そんな馬鹿な！
心の中で渦巻く反論は声にはならなかった。組織よりも蒼司を信じたい、という気持ちがあったからだ。たとえそれが、組織の意向と違うことだとしても。
「どうやらお互い、僕らを逢わせたくなかったらしいね」
その言葉と、昼間の祐里の言葉が重なる。
「姉さん……聞きたいことは多くあるだろうけど、とりあえず共同戦線といこうよ。相手方も本気みたいだし」
「……うん、わかった」
いくつもの想いや考えにとらわれて頭の中は混乱していた。けれど、焦ることはない。こうして蒼司に生きて会えて、話ができているのだから。
いまは目の前のことだけを考えよう。そう、言い聞かせた。何度も、何度も——

百体もの邪族を前に蒼司は落ちついていた。恭子が御神三家で成長したように、蒼司もまた敵の組織で訓練を受けてきたのだろうか。だが、法剣はたったの一本。蒼司の持つ剣が何かはわからないが、霊剣の一種だろう。はたして勝機はあるのか。

「さあ、行こうか」

「……こんなところでいなくならないでよ、蒼司……」

すべての願いを込めて、それだけを伝える。

「……わかってる」

二人は同時に屋上のコンクリートを蹴った。

『氷獄の女王よ、愚かなる魔の眷属を汝の腕に抱きたまえ！』

恭子の法術により数体の邪族が氷に閉じ込められる。そこに蒼司が跳びこんでいき、素早い剣さばきで確実に核を破壊していく。その速さと精確さは恭子を上回っていた。空白域ができたところで逃げたいのが本音だが、そうもいかない。実体化したら街がどうなるか。想像しただけで背筋の凍る思いがする。

途切れることのない邪族の攻撃に立ち止まることは許されない。

周囲の邪族を振り払いながら、詠唱を繰り返す。

『黄泉の番人よ、終わりし命の器を運び冥土へ帰せ！』

発動と同時に後方からの殺気。身体を反転させながら重い打撃を法剣で受け流す。そのとき恭子の視界の隅に夜よりも暗いものが映った。

「……中位邪族も混ざってるのね」

ギリギリで気づいてアークエネミーを回避する。転がった先の邪族を居合いの要領で斬り倒し、不意打ちには結界で対応する。かなり倒したはずだが、減った気はしなかった。桁の違いが身に染みて、ふと恭也に告げた菓子パン百個が多すぎることを実感した。

攻撃をかわしながら次の詠唱をしようとして、唐突に嫌な予感におそわれる。

「蒼司、こっち！」

近くにいてくれた弟に駆け寄り、呪文を唱える。

『天界の神皇よ、いにしえの魂の契約に基づき結界を発動。至高の聖なる輝きにて邪悪を打ち払え！』
間一髪、発動した結界の外で大気が紅く染まり、震えた。超高温の爆発。聖五紡結界でなければ死んでいただろう。蒼司は悔しそうに歯噛みしていた。
「もう召喚に成功していたのか……」
詳しい事情を知っているような物言いに、恭子は一抹の不安をおぼえた。
残っていた低位邪族の大半が消し飛び、たった一体の邪族が圧倒的な存在感を示していた。その邪気は百の邪族の総量を軽く凌駕している。
制服のポケットの中で携帯が鳴り響く。
「……もしもし、祐里さん？」
『恭子ちゃん、いますぐ逃げて！』
らしくないほどに焦っている祐里の声が届いた。普段は滅多にないことだが、いまならわかる。もし実体化したら、どうあがいても勝てる相手ではない。そもそも霊体ですら滅ぼせるかわからないのだ。
『高位邪族が――』
「すみません……もう、遅いです」
状況だけ伝えて一方的に電話を切った。
どのみち逃げられる訳がない。それは二時間後の街に死刑宣告をしているのと同じことなのだから。
「……この中で待ってて」
恐怖にすくみそうになる身体を押さえつけて、恭子は言った。誰かがやらなければならないのだ。
――私以外に誰がいる？
邪族を相手に限れば、個人の戦闘力で恭子を超える人などいない。法剣を扱えるのも恭子だけだ。覚悟を決めるしかなかった。
蒼司は黙って自分の剣を見つめていた。

『天界の神皇よ、いにしえの魂の契約に基づき法剣を解放。我が身を依り代に力を示せ！』
詠唱についで、恭子の身体が青白い輝きに包まれる。神術のひとつ、神聖降臨。聖五紡結界と違って発動時間が短いのが難点だが、身体能力の強化・法術の詠唱簡略化・最上位の術の行使権といった特典はある。これでも滅ぼせなければ、もう方法はなかった。
半球状に張り巡らした聖五紡結界から飛び出して走る。大抵の攻撃は身に纏った自然発生の反射結界が弾いてくれるが、高位邪族に試したいとは思わない。
目では追いきれない鋭い攻撃を、勘で避けながら接近した。
『五柱の一、風の王！具現せよ、汝の力——雷撃！』
恭子の指す先に、星の瞬く夜空から稲妻が落ちる。その一撃に邪族は咆哮した。
素早く背後に回りこみ、法剣を振り上げる。巨体の肩口を薙いで正面へ。連続して放たれる黒球をなんとか凌ぎながら、邪族を見据える。
『五柱の一、天界の神皇！具現せよ、汝の裁き——聖印！』
一点に向けて、自分の知る限りで最強の術をぶつける。見逃してしまう程度にだが、核に亀裂がはしるのがわかった。しかし、まだ終わりではない。
邪族の動きを見切れず、わずかに反応が遅れる。黒い閃光が真っ直ぐにほとばしり、たやすく反射結界を破っていく。その軸線を外せずに、左肩に鈍い一撃が突き刺さった。
「くっ……」
邪族が再び黒球を連発してくる。
恭子の短い詠唱と法剣自身の力で対邪障壁を発動して、幾重にも重ねられた反射結界とともに、ようやく正面の数発だけを消失させる。防ぎきれなかった分は身体のあちこちに掠ってしまった。あと一発、最高位の術を加えれば倒せる。それが分かっていながら、実行できるだけの余力は残されていなかった。

ふっと、恭子な身体から聖なる輝きが失われた。
「あ――」
かくんと膝が落ちる。
『劫火、圧縮――』
術を発した声は恭子のものではなかった。
「蒼司！？」
「うぐっ――！」
恭子のそれとは明らかに質の違う法術――暗黒の炎が高位邪族に収束して、弾けた。同時に蒼司の身体が崩れ落ちる。
「な、んで？」
自然と口から出てきたのは、気遣う言葉ではなく問い詰める言葉だった。痛む肩を押さえながら、おぼつかない足取りで蒼司の前に立つ。
「はぁ、はぁ……」
蒼司も左胸を押さえて荒い息をつきながら、立ち上がりフェンスにもたれかかる。右手の剣には法印の共鳴痕が刻まれていた。
「……なんで、二本あるの？」
大事なことだった。この法剣こそが、家族の――姉弟の運命を狂わせた、すべての元凶なのだから。そして恭子は気がつかなかった。高位邪族がまだ滅びていなかったことに。
「くそっ！」
舌打ちして、蒼司が恭子を抱え跳びすさる。突然のことに恭子は反応出来なかったが、手を離すと蒼司は迷わず法剣をかざした。
『混沌、送還――』
二度目の闇の術は今度こそ高位邪族を滅ぼす。また、限界に達していた蒼司の意識も、ついに途切れた。
「蒼司？――蒼司っ！」

＊　＊　＊

薄暗闇の中、電気もつけずに恭子は部屋の片隅に座り込んでいた。膝を抱えて、うつむいて――

「恭子ちゃん？」

顔を上げると、心配そうに声をかけた祐里が扉に寄りかかっていた。

蒼司が倒れたあと、祐里が駆けつけて家まで蒼司を運んでくれたのだ。いまも簡単な検査をしてくれていた。考えてみれば、今日は祐里の世話になってばかりだ――美里のことも、蒼司のことも――本当に申し訳なく思う。

「……蒼司は？」

「ん、大丈夫。よく眠っているわよ。たぶん――精神力の使いすぎで気絶しただけだと思うから。恭子ちゃんのもそうだけど、法術は魂を削るからね」

そう言った祐里の表情は、翳っていてよく見えなかった。

「そうですか……よかった」

命に別状がないとわかって、少しだけ安堵する。

「まったく、二人とも無茶のしすぎよ。時間はあったんだから、増援を待って囲めばもっと楽だったのに。聖五紡結界も張っていたんでしょう？」

「……すみません」

邪族を滅ぼさなければ、という気持ちばかりが先行して、そのことは失念していた。

「私も今日は泊まらせてもらうけど……なるべく早く寝なさい。詳しいことは――明日、蒼司くんから直接ね」

「……はい」

「それじゃあ……おやすみ」

静かに扉が閉じられた。

世界の常識から外れた非現実に身を置く恭子にも、それなりの日常が存在した。組織の一員として任務をこなす一方、遅刻・早退・

欠席を繰り返しながらも学校に通う毎日。
恭子の生活の中で、組織と学校は完全に区別されたものだった。互いのことは持ち込まないようにする。それが『普通の女の子』で在り続けるための、自分で決めたルールだった。
それなのに――美里を危ない目に遭わせてしまった。落ち着いて考えてみると、蒼司と再会できた喜びより後悔のほうが先に立つ。恭也や祐里に対しても言えることだが、法剣の所持者である恭子の近くにいるだけで危険度は格段に増す。それだけ狙われやすくなるから。
一日で何体の邪族を滅ぼしただろう。殺すという行為に慣れてしまった自分を恐ろしく思うこともある。吐き気がすることも。それでも、やらなければならない。母の面影を追って、法剣を手にしている限り。
明日になれば、すべてがわかるのだろうか。御神三家の邪族の保有、もう一本の法剣、高位邪族――自分が関わっているのに、知らないところで動いていることがあるのは嫌だった。
わからないことだらけで、思考が混濁してくる。
とりあえず、寝よう。そう思ったがベッドに入る気にはなれず、膝を抱えたまま背を丸めて目を閉じた。
明日になっても――このさきずっと――蒼司と一緒にいられるように願いながら。
夜中というにはまだ浅い闇の中、星と月だけが傷ついた二人を優しく見守っていた。

終わりの始まり（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

第1章が一応の終了ですが、続きも機会があれば書きたいと思っています。

いかがでしたでしょうか？

伏線だけ多いので、流れがわかりにくいかもですが、ぜひ感想をください。

幸せのひととき（前書き）

なんと二年越し？
第二章、はじめました！
といっても他にも放置しているのがあるので、並行作業になると思いますが。
必ず完結させますので、お付き合い頂けたら幸いです。

幸せのひととき

頭がはっきりしないまま、自然と開いた瞼。
――薄手のカーテンから洩れる陽の光は、いつもより明るく部屋を照らす。
痛いほどに鼓膜を震わせるはずの、おきまりの電子音が届いてこない。
――代わりに聞こえてくるのは、懐かしく温かいぬくもりの調べ。
ベッドではなく、硬いフローリングの床にうずくまっている。
――身体のあちこちで、あざを圧迫されるような鈍い感覚がはしる。
「ん……」
条件反射なのか、上体を起こすと目覚まし時計のほうに目がいった。
時計の短針が、いつもと逆方向を向いている。一瞬、思考が停止しかけたが『完全に遅刻してる！』などと思ったわけではない。今日が土曜日で学校が休みだというのはわかっている。
ただ、目の錯覚でも、耳の変調でも、身体感覚の誤認でもない。ある種の異常事態が、恭子のなかで確認されただけだ。
十分な睡眠による疲労の回復と、状況の整理をはじめた明確な意識。
部屋を出て階段を下りる。もちろん、服装は昨日のまま。いいかげん制服にしわができていて乱れているのだが、精神的に着替える余裕がない。
――トントン、トントン。
ちゃんと聞こえた。やっぱり幻聴じゃないらしい。
やけにリアルだが夢オチの可能性も考えながら、半信半疑でリビングを覗きこむ。
「あ……」

台所で包丁を握る女性が、顔を上げてこちらを見た。
「あら。おはよう、恭子ちゃん」
祐里だった。そして——
「おはよう、姉さん」
「っ……うぁぁっ……」
初めてかもしれない。こんなにも熱い感情が溢れてくるのは。殺意や敵意、怒りや憎しみといった負の感情でなく、嬉しい涙が零れだすのは。
そこに、この四年間ずっと求めつづけた光景があった。
眠りの中ですら見ることの叶わなかった『家族』と一緒にいる場面。
記憶という名の思い出が、夢という名の願いが、目の前の現実に重なりだす。
昔のように、ソファーの指定席でくつろぐ弟の姿をみつけて、恭子はその場に泣き崩れた。

「少しは落ちついた？」
手の込んだ食事をテーブルに並べて、祐里も席につく。
「……はい」
小さく答えた恭子の隣には、違和感もなく蒼司が落ちついている。あまりにも『あたりまえな光景』に見えてしまい、それが逆に不安の残り火を煽った。
夢じゃないと信じたくて、ぎゅうっと抱きしめたい衝動に駆られたが、それはどうにか抑える。やっぱり、恥ずかしいし。
家庭の食卓で思い浮かべやすい、ありきたりの和食。その味や匂いに母の愛情とでも言うべきものを感じ取ったのは、すっかり空気に酔ってしまっているせいだろうか。
温かな——それでいて儚い——だからこそ、大切な幸せ。
箸を進めながら、自然と会話は弾んでいく。
面白おかしく、恭子のドジや恭也に対する不満を並べたてる祐里。

姉弟を気遣う様子がわからないのが、ありがたかった。
すっかり成熟してしまった見た目とは裏腹に、笑いながら向こうでの生活を楽しそうに話す蒼司。相手の組織に居たとはいえ、ひどい目にはあっていなかったのだとわかると、少し気が楽になった。
恭子も、冗談めかしながら四年間の想いを伝えていった。ずっと心配していたことはもちろん、何度もくじけそうになったときに支えてくれたひとがいて、そのたびに意志は強くなっていったこと。
ほんのひと時かもしれない。けれど、たしかに求めた幸せがあって、恭子はこのときのことを一生忘れないだろうと、そう思った。
三人とも核心には触れない。けどそれは、わざとじゃない。無理しているのでもない。
そんな必要がなく、ただ笑いあっていられた。

恭子と祐里で洗い物を終えて、うららかな陽気にあてられたようにソファーで静かな時間をのんびりして費やしていると、祐里はいつもの顔――わずかな緊張感と、揺るぎない決意……とでも言えばいいのだろうか？ともかく、表情を一変させて告げた。
「それじゃあ、そろそろ行きましょうか」
本音をいえば、聞きたくはなかった言葉。
「御呼びがかかってるわ。二人とも、ね」
なんらかの意味が込められたウインクを、祐里は蒼司に投げかけた。それがどんな意味をはらんでいるのか、全くわからなかったが。
「そうそう、柚原さんも本家のほうにいるから」
「え……ど、どうして！？」
なんでもないことのように、あっけらかんと言った祐里を凝視してしまい、恭子はパニックになる。美里は支部で保護のはずだった。ただの一般人なのに――
「さあ？御神三家に知り合いでもいたんじゃないの？」
軽い調子の祐里を、恭子はおもわず問い詰めようとした。けれど、祐里に対する尊敬とか感謝の想いが邪魔して、自分のなかでブレー

キが掛かって、言葉は喉元で止まった。
「ま、行けばわかるでしょ。車は表に用意してあるから、準備してらっしゃい」
蒼司が立ち上がる。昼食を済ませてから今まで、弟は一度も口を開くことはなかった。

祐里が姉弟を連れて行ったのは、山をひとつ越えたむこうの御神三家——本部。ちなみに、恭也は支部で留守番らしい。
高層ビルの中にある支部とは違い、純和風の家屋。二階建ての建物は少なく、平屋が並んでいた。
「本家は初めてよね？」
「はい」
恭子は答えてから、隣で難しい顔をしている蒼司を怪訝に思った。
「どうしたの？」
「いや……なんでもないよ」
明らかに態度が変わった蒼司を見て、祐里は笑いながらもやんわりと釘を刺す。
「私より偉い人なんかごろごろしてるんだから、ここではおとなしくしていなさいよ？」
含みのある言い方に、恭子は引っかかりを覚えずにはいられなかった。
「んー、出迎えがあるはずなんだけど……」
不気味なほどに静かで、巨大な木造の正門には人ひとりいない。
それでも、危ない場所ではないということは分かっていた。対邪障壁の応用なのだろうか、周辺一帯に巡らせている結界のせいで邪気がまったく感じられないのだ。
不意に、恭子と蒼司が左右対称にまったく同じ動きをした。二本の法剣が抜かれて、派手に火花を散らす。
「——なるほど、法剣の所持者か。データでしか知らなかったけど、実在してたとはね」
たった一振りの霊剣でなんなく姉弟を抑えてみせたのは、祐里と似た雰囲気を纏った大人の女性だった。
「先輩……悪ふざけはやめてください」

その女性に向けられた祐里の声の変化に、恭子は驚かされた。敬語になっただけで、口調自体がそれほど変わったわけではない。けれどそれとわかるほどに、敬愛と信頼の想いが込められていた。
「ちょっとした腕試しじゃない――ようこそ、御神三家へ。朱家の家長補佐、神崎優香です。はじめましてかな？」
綺麗な黒髪の女性は、ちらりと蒼司を見やってから、微笑みかけて恭子のほうへ手を差し出した。
「え……し、失礼しました！　私、つい――」
法剣を納めて頭を下げると、おずおずと女性の手を取った。蒼司も剣先を下ろしている。
「気にしなくていいのよ。最低限、自分の身は自分で守れないとね」
御神三家の総帥、神崎誠一郎の一人娘。その実力は三人の家長にも劣らないという。父親が総帥と朱の家長以外の職を退いたいま、作戦部のトップにいるのは、この女性だ。もっとも、いままで会ったことはなかったが。
優香は祐里のほうに足を運んで、その頭をぽんぽんと撫でた。
「やめてください……恥ずかしいじゃないですか」
「まあまあ――昨日は悪かったわね。いろいろと余計な飛び火があったみたいで」
「……いいですよ。みんな無事でしたし。どぶねずみの仕業でしょう？」
ぴくっと、蒼司の腕が動いた――気がした。
「どぶねずみって……関係者各位の善人に失礼じゃない。ねえ？」
訊ねるように優香は、門の陰のほうに声をかけた。
「別に、気にしないっすよ。あそこまでやられると、言い訳すらできないっつうか」
「……わからなかった」
つい口にでてしまう。優香といい、この青年といい、こうも気配を消されるとは。
「彼は？」

祐里も知らないらしい。
「ええっと……自分で名乗る？」
苦笑しながら、優香はその青年に視線を送る。
彼は、はっきりと蒼司の眼を見据えて、言った。
「……神代佑希だ。よろ――」
止める暇もなかった。ふたたび繰り出された法剣は、神代を名乗った青年の首筋に突きつけられる。
蒼司は初めてみる怒りの表情で、佑希は平然とお互いを見ていた。
優香は困ったようにして、祐里は静かにふたりをみつめている。
誰一人、動じないなかで、恭子だけが驚きに目を見開いていた。
静まる空間。止まった時間はいつまでも続くかに思えた。少なくとも、恭子は動けない。
「――やめなさい」
そんな中で蒼司に声を掛けたのは、やはり祐里だった。だが、蒼司は無言で首を振る。
「やめなさい。あなたじゃ――勝てないわ」
「――っ！？」
急に蒼司が飛びすさる。その場に一瞬、朱い火柱が上がり、そして消えた。
「法……術……？」
呆然と、恭子は術の行使者をみつめていた。
「そんなに便利なものじゃないわよ。直系の血にしか頼れない、一子相伝の御神の理。しょせん、まがいものよ」
優香が答える。
「まがいものって……」
予備動作もなく、短い言の葉を紡いだだけ。直接、異界に干渉しているのか、媒介になるようなものは手にしていない。
恭子自身、法術が使えるだけにわかる。交戦中にこの速さで発動されたら、反応しきれないかもしれない。
大きな力の差を感じていた。まともにやりあったら、たぶん勝て

ない。

——このひと、強い。

「とりあえず、立ち話もなんだし中に入りましょう。いろいろと、話したいことも聞きたいこともあるしね」

そういって目を細めると、優香は蒼司をみつめたのだった。

本当はわかっていた。弟の抱える物の重さを。自分の知らないことが、知ってはいけないことが多くあるのだということを。けれど、それを認めたら一緒にいられない気がして、恭子は虚しい努力をしているのだった。

＊　＊　＊

「——ずいぶん、広いですね」

本家の表向きの敷地面積もそうだが、実際のそれは比ではなかった。

和式の地上一階、洋式の地下五階。六階層から成る、御神三家の本部。

通常業務は上の三階層で行われる。一般隊員は許可なしに地下三階へ降りられない。さらに最下層は不可侵領域となっており、組織内でも数えるほどしか入れる人はいない。

御神三家の指揮系統には、直系で構成される家長会議・代表者会議と、傍系の司令室が存在する。家長会議・代表者会議の下に九ヵ所の司令室があり、作戦部・情報部・研究部を統括している。御神の名を冠さないのが傍系であり、星野家や風見家も属する。恭子たちが高い霊質を秘めているのは遥か昔に御神の直系の血筋にいたからだ。もちろん、ほかの家系にも霊能者はいるが、御神三家の人間はだいたいが同じ流れのなかにいる。

いまのところ家長会議は凍結されていて、代表者会議もめったに開かれない。そのため総帥の直接命令がない限り、司令室の大幅な権限が認められていた。

……全体的にみれば、まとまっていないかもしれない。
実際、分裂の危機は何度かあったし、いまも権力争いは続いていたりする。
だが、恭子自身にはあまり関係ない。そう思っていた。ただ、優香が出てきたことで、厄介ごとに巻き込まれるかもしれないとは思い始めていたが。
「そうね……まあ、いろんな部署が分散しているだけで、部屋数はそう多くないんだけどね。祐里は、二年ぶり？」
「そう、ですね……」
苦笑まじりの祐里の声が届く。
優香と佑希を先頭にして、祐里と恭子、後ろから蒼司がなにやら難しい表情でついてくる。話しかけてはいけない感じがして、恭子は黙ったままでいた。
一行はまもなく立ち止まる。
地下三階へ続く階段の隔壁の前。許可のない人間を阻む重く冷たい鉄壁。厚さは三十センチほど。本部にはエレベータがないため、セキュリティは階段のみ。
認証を終えた優香は、あちら側で開閉装置のシステムを起動して、一時的にセキュリティを解除する。そうしないと、お客様が通るときに警報が鳴ってしまう。ＩＤやパスワードを持たない蒼司は、余所者だから。恭子も本家に来るのは初めてだが、御神の人間である以上、ＩＤとパスワードは持っていた。
数十段の階段を下りて、一直線に伸びた通路を通り過ぎる。そうして広がるのは、地下四階、神通の間。
無機質に映る、全体が灰色のロビー。人はまばらに散り、談笑している者も多い。けれど、ここにいるのは紛れもないレベル３以上の霊能者たち。

＊　＊　＊

御神三家で用いられる霊質を計るものさし。それがレベルだ。一般人にでも霊質はある。それがある数値を超えると、レベル1の霊能者と認定される。

これと似たものに邪族の邪気濃度を表すランクがあるが、これは低・中・高位ごとにEからAの五段階にわけられる。全部で十五段階。まあ、低位のAと中位のE、中位のAと高位のEでは違いすぎるのだが。

レベルは1から9に分けられるが、レベルが高くても自覚がなかったり力が使えなかったりすると、一般人とみなされる。

レベル6として認定されている恭子には、もちろん能力があった。干渉。動く物体の軌道を変えることができるもの。

ただし、効果範囲が半径二メートルという、ごく限られたものだ。まず、存在するすべての物質に作用するということ。つぎに、軌道変更に必要な不可視力は速度に比例するということ。つまり、静止状態にある物質には干渉できないのではなく、ゼロという力が働いていることになる。結局うごきはしないのだが、これは重要なことだ。数学で例えればわかりやすいだろう。1にゼロを掛ければ0だが、掛けるものがなければ1のままなのだから。この性質がときに役立つこともある。

一般隊員と呼ばれているのは、レベル1と2の霊能者やその血縁の人々のことで、主に情報部や研究部に配属されている。理由は、邪族が視えるのは作戦部の人間だけで十分だからだ。そのため、御神三家には有能な一般人も数多くいた。

現在わかっているところによると、国内の霊能者人口は1パーセントの百三十万人とされるが、このなかで一般人とみなされる者を除くと、さらに1パーセントの一万三千人。

霊質は訓練や修行で高めることが可能なため、リストは毎年更新

されているが、レベル５以上になると変化に乏しくなる。
　詳細を述べるとするなら――レベル５が五十三人、恭子と同クラスのレベル６は十九人で、レベル７が十三人、レベル８はわずかに五人。そして、神の領域と呼ばれる、世界に七人しかいないレベル９は、一人だけ国内に存在していた。
　御神三家の最高位はレベル８の二人。しかし、二人とも行方不明である。
　ちなみにレベル９の水崎花音だが、古都在住でいかにもそれらしく、魔術全般とくに陰陽道に精通している。神皇の娘と畏敬される彼女は、争いを嫌いどこの組織にも属さずに、一介の女子大生として日々を送っているらしい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4427a/

光と闇の法剣

2010年10月10日05時37分発行